

いわゆる〈発見〉の「タ」に関わる考察

—「スル」形と「シタ」形の使用に着目して—

帖 佐 幸 樹・白 川 博 之

Ta as an Expression of the Relationship between Speaker and Events in Japanese

Hideki CHOSA, Hiroyuki SHIRAKAWA

1. 研究の背景と動機

次のような「…タ」は、話し手の心的態度（ムード的な意味）を表すとされている（井上 2001: 98）¹⁾。

(1) (探していた本がカバンの中にある(入っている)のを見つけて)

- a. あ、ここにあった (入ってた)。
- b. あ、ここにある (入ってる)。

(井上 2001: 99 一部改編)

(1) のような、いわゆる〈発見〉の「タ」をめぐる議論はこれまで数多く行われてきた（寺村 1984, 高橋 1985, 金子 1995, 井上 2001, 定延 2004b など）。近年では、井上 (2001) や定延 (2004b) による、「タ」の持つ〈過去〉というテンスの側面を中心とした豊富な記述が見られる。

しかしながら、以下の例は、〈過去〉というテンス面だけでは説明がうまくいかないように思われる。

(2) (机の上に財布を置き忘れたのを思い出し、友人と急いで取りに戻ったところ、もとの場所に財布があるのを見つけて)

- a. ある！ そっくりあるよ。よかった～。
- b. あった！ ?そっくりあったよ。よかった～。

(2a) においては2つの「ある」が表れているが、ここで〈発見〉のニュアンスが強く現れているのは前者の「ある」である。この場合は(2b)のように「あった」と言い換えることができる。しかし、後者の「ある」に関しては〈発見〉のニュアンスはそれほど強く現れていない。加えて、「あった」で言い換えるとやや不自然な印象になる。

(2) のようなタイプは、どちらかといえば、以下の用例と関わりを持つものと考えられる。

(3) (野球の試合、出塁したランナーが思いがけない場面で盗塁を狙った際に)

- a. ランナー走った！
- b. ?ランナー走る！

ところで、〈発見〉の「タ」の問題を論じる際、従来の研究では、「いる」「ある」のような「状態動詞」や、「動詞+テイル」(cf. 入ってた) など(いわゆる状態形)に限って〈発見〉の「タ」を論じたものもあれば、「あ、笑った」など動作動詞の用例も発見の「タ」に含めているものもあり、考察の射程に関して研究者によって立場が異なっている²⁾。

しかしながら、アスペクト的な観点から「出来文」として「動作の始発」を捉えるものとされる、(3) のような「…タ」の用法においても、いわゆる〈発見〉のニュアンスが確認される。そのため、このような「…タ」の用法も考察の射程に含めるべきではないかという疑問が生じる。

ちなみに、(3) は「…ル」の形ではやや言いにくい場面であり、この場合は〈発見〉のニュアンスは確認されない。

そこで、本稿ではいわゆる〈発見〉の「タ」に関わる問題に対し、以下の見込みを持って考察を行う。

- ・いわゆる〈発見〉の「タ」に関わる問題については、井上 (2001) や定延 (2004b) で論じられているタイプだけでなく、異なるタイプが確認される。
- ・異なるタイプの考察から、〈発見〉のニュアンスは、ル形とタ形の使用とは独立の要因によって生じるものであって、〈発見〉のニュアンスの出処は、「話者の認識と実際の状況とのズレ」が関わっている。
- ・加えて、(3) のような用例を踏まえて考察するためには、テンス面での「…タ」や「…ル」の機能を考えるだけでは不十分であり、アスペクチュアリティを踏まえた、事象のレベルで論じる必要がある。

2. 本研究の立場

(2) や (3) のタイプを考察するに当たり、本稿の立場を明らかにしておきたい。

2-1. 主文末の「タ」の扱いについて

井上 (2001) では、「主文末の「タ」が表すのは「発話時以前の出来事・状態である」というテンス的な意味のみ」(井上 2001: 99) であると述べられており、この考え方は定延 (2004b) にも踏襲されている。この記述は次のような名詞述語文や、形容詞述語文のような静的な事象を扱う場合においては確認しやすいと思われる。

(4) その日の天気は雨だった。

(5) その地方は、冬はとても寒かった。

(定延 2014: 4)

しかし、動詞述語文の場合はどうであろうか。(1)、(2)、(3) のような動詞述語文の場合においては、事象と「タ」が関わることで生じるアスペクチュアリティが関与していないとは考えにくい。ともすれば、井上 (2001) の述べる「テンス的な意味」よりも、事象全体を踏まえて実現するアスペクチュアリティが前面に現れる場合もあると思われる。

確かに、〈発見〉の「タ」の議論では「いる」「ある」という「状態動詞」による静的な事象を扱っているのだから、上の議論は退けられるのではないかといった意見は予想される。しかし、(2) のようなタイプの「ある」を含んだ事象は本当に静的な事象であろうか。そもそも、「状態動詞」を用いているのだから、即、静的な事象であるという考え方は正しいのであろうか。

ここでは、定延 (2004a) の記述を援用して以下のように考える。定延 (2004a) では、以下の用例に対して「探索は状態をデキゴト化する」(定延 2004a: 194) という主張を行っている。

(6) X: [目の前の納豆パックを指して] こんなものは日本にしかないでしょうね。

Y: a. それ、北京にありましたよ。

b. それ、北京でありましたよ。

(定延 2004a: 193)

ここで述べられている「探索」とは、「未知の領

域がどんな様子なのかを調べる、一種の体験である。」(定延 2004b: 14) と記述されている³⁾。このような「探索」が行われる場合において「状態がデキゴト化」する場合があるとされる。

さて、ここで先ほどの (2) を思い出されたい。(2) では、「あるかどうかわからない財布を取りに戻る」という一種の「探索」を伴った体験の上での発話であると言える。つまり、(2a) における「ある」を含む事象は状態、すなわち、静的な事象として捉えられているのではなく、定延 (2004a) が述べるような、デキゴト、つまり、動的な事象として捉えられていると考えられる。そのため、事象レベルで実現するアスペクチュアリティを考慮する必要が出てくるのではないかというわけである。

本稿では、さらに定延 (2004a) の「探索による状態のデキゴト化」に加えて、丹羽 (1996)、尾上 (1982) の記述を援用する。

(7) ル形は、「実現を前にした未実現の状態」を表す。
(丹羽 1996: 708)

(8) a. (完成まぢかの絵を見て) もうできるね。
b. (崖っぷちに手だけで体を支えているのを見て) あー、落ちる。

(丹羽 1996: (9))

(9) (9) [本稿の (8)] のような例は、近未来や現在に接する直後未来における実現を表すとともに、動きの実現を予想させる現前の状態を表している。

(丹羽 1996: 708)

以上の記述から言えることは、「スル」形は、アスペクツ的な意味として「実現を前にした未実現の状態」を表すことができ、かつ、その動作・変化は目の前で進展している最中であっても構わないということである。

加えて、尾上 (1982) では、「[「スル」形そのものの意味的な性格は、述語として事態を直接的に言語化するだけのもの」(尾上1982: 23 下線部は引用者による) と述べており、特に眼前描写などの場合は、文脈的状况や、発話的状况から「未完了」のアスペクツ的な意味を帯びることになると述べている。その中で、「〈現場的状况〉による時間性不問のタイプ」として以下の用例を挙げている。

(10) 発見・驚嘆・眼前描写

「わっ、人形が動く！」

「朝だ、朝だよ。朝日がのぼる」

(尾上 1982: 21)

(2a) に即していうならば、「探索」を伴った場合、財布を見つけて「ある」と言うことが自然であるのは、まさしくデキゴトとして、「コトが実現中である」ということに焦点が当てられることになり、眼前描写であることも絡んで、その事態を「アル」の形で直接的に述べたてていると考えられる。

一方で、(2b) の「あった」のような場合とは、「探索」を伴い、状態がデキゴト化した場合には、静かな状態に一種の「波打ち」が起きたことを「出来文」として表していると考えられる。つまり、「財布があるかどうかわからない」といった状況から、「財布がある」という状況に変化したことを「出来文」として「あった」の形で述べていると言える。(2b) の後者の「あった」がやや不自然であるのは、「財布がある」という事実は既に話者によって確認されており、「あった」という「出来文」の形で表すことができないためだという説明が与えられる。

以上、「いる」「ある」などの「状態動詞」を用いても、事象においてはデキゴト化が起こっている場合があることを示し、その際は、事象が〈未然(実現中も含む)〉か〈已然〉かといったアスペクチュアリティの要因を考慮する必要があることを述べた。つまり、「状態動詞」を用いているからといって事象までもが静的なものであるとは限らないのである。

2-2. ル形、タ形の使用と〈発見〉のニュアンス

井上 (2001) では、「『発見』『思い出し』といったムード的な意味は、「タ」の基本的な意味とは別のレベルで生じる。」(井上 2001: 99) と述べており、主文末の「タ」の基本的な機能とは切り離して考えている。

本稿も基本的にこの考え方に従う。というのも〈発見〉の「タ」に関わる用例の振る舞いを観察したとき、タ形を使用しても〈発見〉のニュアンスの現れないものや、ル形を使用しても〈発見〉のニュアンスが確認されるものがしばしば確認されるからである。井上 (2001) では「別のレベル」が何を指すのか詳細について述べられてはいないが、本稿では、それを明確化することも試みる。

3. 考察

ここでは以下の用例を用いて考えてみたい。

- (11) (医学部の実験棟を甲が歩いていると、足元をネズミが走り去った。研究室に入って)

甲：おい、ネズミが逃げてないか？

乙：(同じ部屋に置いてあるネズミの小屋を確認して)

a. いや、ちゃんといるよ。

b. ??いや、ちゃんといたよ。

- (12) (医学部の実験棟を甲が歩いていると、足元をネズミが走り去った。研究室に入って)

甲：おい、ネズミが逃げてないか？

乙：(隣の部屋まで行き、置いてあるネズミの小屋を確認して帰ってきて)

a. ?いや、ちゃんといるよ。

b. いや、ちゃんといたよ。

(11) と (12) では〈発見〉のニュアンスは必ずしも現れていないが、(11) では「いる」のほうが適格性が高く、(12) では「いた」の方が適格性が高い。

ここで考えられるのは、「いる」が用いられるためには、その事態が実現中であることが確認される必要があるのではないかと予想される。具体的に述べると、(11) では「ネズミがいるということを確認した」という情報よりも「今まさにネズミが小屋にいる」という情報を相手に説得的に述べることができる状況(ここでは目の前にある小屋にネズミがいるということ)が整っているため、「いた」という事実よりも「いる」という事態が実現中であることに焦点があてられる。また、(11) において「いた」が不自然になるのは、(11) のような状況で「いた」を用いた場合は、「出来文」として表れること becoming ため、状況と一致せず不自然になるのだと説明できる。

一方で (12) は、「今まさにネズミが小屋にいる」という情報を伝えるには (11) と比較して時間的な隔りがあるため、説得的に述べることができない。そのため「いた」という事実のみを切り出して述べている。この場合、ネズミを確認してから時間的な隔りがあるため「いた」は〈過去〉のテンスの側面が前面に出ていることになる。

このことから、「スル」形によって、実現中の事態を捉えるには、その事態が確認されている（ここでは確かに目の前の小屋にネズミがいるということ）、かつ、説得的に述べることができる状況（ここでは目の前で事態が起こっていること）が整っていることが重要であると考えられる。尾上（1982）による記述を踏まえるならば、「スル」の形で事態を直接的に言語化するためには、それなりの条件が要求されるということになる。

加えて、〈発見〉のニュアンスに関しては以下の例を踏まえながら考えてみる。

(13) (医学部の実験棟を甲が歩いていると、足元をネズミが走り去った。研究室に入って)

甲：おい、ネズミが逃げてないか？

乙：(同じ部屋に置いてあるネズミの小屋を確認して)

a. どうしよう、いない。逃げたみたいだ。

b. ??どうしよう、いなかった。逃げたみたいだ。

(14) (医学部の実験棟を甲が歩いていると、足元をネズミが走り去った。研究室に入って)

甲：おい、ネズミが逃げてないか？

乙：(隣の部屋まで行き、置いてあるネズミの小屋を確認して帰ってきて)

a. どうしよう、いない。逃げたみたいだ。

b. どうしよう、いなかった。逃げたみたいだ。

(13)の用例だと、「いなかった」の適格性がかなり下がる。このことから、(11)と同様に目の前で確かに起こっている事態を「シタ」で述べると「出来文」として表れてしまうため不適格になることが分かる。一方で、「いない」は適格であって、かつ、この場合は〈発見〉のニュアンスが確認される。「いない」の適格性が高いのは(11)と同様に、目の前で「ネズミが小屋にいない」という事実を説得的に述べることができるからだと考えられる。

(14)の場合は、「いない」「いなかった」共に適格であって、ともに発見のニュアンスが表れている。(14)において「いなかった」が使用できるのは、(13)の場面に比べて時間的な隔りがあるため、〈過去〉のこととして「シタ」の形で事実を切り取ることができるからだろう。また、「いない」が使用で

きるのは「ネズミが隣の部屋の小屋にいない」という事態が実現中であって、かつ「ネズミが逃げているかもしれない」と思っている甲に対して、「やっぱりネズミは逃げていたか」と思わせることができる点で説得力を有するからであると考えられる。

以上、ここまで(11)~(14)の用例を観察したが、ここから言えることは、「スル」形と「シタ」形のどちらが用いられるかということと、〈発見〉のニュアンスが現れるかといったことは、やはり、それぞれに独立した要因を考える必要があるだろうということである。

まず、「スル」形「シタ」形のどちらが用いられるかといった問題についてであるが、「スル」形が使用されるためには、話し手の中に「事態が存在する見込み」が無ければ使用できない。そのため、(15b)は厳密には適格性が下がっていると言える。

(15) (探していた本がカバンの中にある(入っている)のを見つけて)

a. あ、ここにあった。(入ってた)。

b. ?あ、ここにある。(?入ってる)。

(再掲 (=1)：一部改変)

(15b)の適格性が下がる理由として、話し手の中には「カバンの中に本が入っている」という見込みはこの場面においては存在していない。つまり見込みのない状態で、かつ今しがた確認したものに対しては「スル」形で事態を表しにくいと言える。この場合においては「シタ」形で「本がカバンの中に入っているということは今しがた確認した」という「出来文」として表す方が似合うのであろう。

一方で、「シタ」が用いられるのは見込みがない場合であると考えられる。(16)において「ある」も「あった」も共に使用することができるのは、財布があるかもしれないし、ないかもしれないといったせめぎ合う状況が作り出されるからであると考えられる。

(16) (机の上に財布を置き忘れたのを思い出して、友人と急いで取りに戻ったところ、もとの場所に財布があるのを見つけて)

a. ある！ そっくりあるよ。よかった〜。

b. あった！ ?そっくりあったよ。よかった〜。(再掲 (=2))

もう一つ、〈発見〉のニュアンスが現れるか否か

といった問題であるが、ここで注目すべきことは、(11) から (14) までの用例において、ネズミを確認に行った「乙」は「ネズミは小屋にいる(だろう)」という見込みを持って確認に行ったということである。そのため、(11)、(12) では実際の状況と見込みが一致したため、〈発見〉のニュアンスは表れていないが、(13)、(14) では実際の状況と見込みとの食い違いがおこっているため〈発見〉のニュアンスが現れる。

(16) において、「ある」、「あった」の共に〈発見〉のニュアンスが現れるのは、財布があるかもしれないし、ないかもしれないといったせめぎ合う状況が作り出されるため、どちらの形式を用いるにしても食い違いがおこるためであると説明できる。

以上から、〈発見〉のニュアンスは「実際の状況と話者の認識とのズレ」が大きく関わることが示唆され、それは「スル」形と「シタ」形に共通して言えることである。

定延(2004b)では「シタ」の形で〈発見〉のニュアンスが現れる要因について、必要なのは「(話し手の)期待」ではなく「探索意識」として述べている。「探索意識」とは「探索に関わる領域がどんな様子なのか」という意識のことであり、〈発見〉の「タ」が自然になるのはこの探索意識が働く限りにおいてであると述べられている(定延 2004b: 26-27)。ここでは(17)では期待がまったくない、または思いがけない場合は、〈発見〉の「タ」は使いにくいとされてきたが、(18)のように思いがけない場合によっても、発見場所が〈発見〉の「タ」の自然さに影響を与えることがあると述べられている。

(17) (通勤電車の中で、向かいの座席の人間の顔を何気なく見てほくろを発見した場合)

a. あ、あんなところにほくろがある！

b. ??あ、あんなところにほくろがあった！

(定延 2004b: 26)

(18) (田中という友人と山中をハイキングしていたところ、すぐ目の前の崖の上に、思いがけずサルを発見して)

a. 田中さん、ほら、あんなところにサルがいるよ。

b. 田中さん、ほら、あんなところにサルがいたよ。

(定延 2004b: 20)

本稿における「見込み」と定延(2004b)が述べる「探索意識」は近似するものであると思われる。(16)の例において言えば「財布があるかもしれないし、ないかもしれないといったせめぎ合う状況」というのが定延(2004b)のいう「探索課題」を設定させるものであると言える。

さらに考察を深めてみると、「見込み」あるいは「探索意識」をもつということは話者が認識に対してやはり傾きを持つということであると考えられる。(11)~(14)の用例では傾きを持った疑問文を使用しているが、やはりその点が関わっているのだと考える。

しかしながら、定延(2004b)との違いを述べるならば〈発見〉のニュアンスが現れるためには「探索意識」が働くだけでは不十分であるということである。(12)を例に挙げれば、「ネズミが隣の小屋にいるかどうかを確認しに行く」という行為から「探索意識」は働いているといえるが、〈発見〉のニュアンスはあらわれていない。このような場合は、形式としては〈発見〉の「タ」と同様なのであろうが、〈発見〉のニュアンスが現れるためにはそこに「事態と認識のズレ」が要求されることが必要になることがわかる。その点で定延(2004b)とは異なる。

次に、冒頭で述べた(2)と(3)の連続性について考察を加える。

(19) (野球の試合、ランナーが二塁にいる場面、ヒットが出てランナーが二塁を離れた瞬間を捉えて)

a. ランナー走った！

b. ?ランナー走る！

ところで、(19)の場面よりも〈発見〉のニュアンスが強く現れるのは以下の場面だと思われる。

(20) (野球の試合、ランナーが二塁にいる場面で思いがけず2塁ランナーが盗塁に出た場面)

ランナー走った！

このことはさきほど考察した「実際の状況と話者の見込みとの食い違い」ということに矛盾しない。なお、(20)の場面においては(21)のように「走る」を用いると適格性が下がる。

(21) (野球の試合、ランナーが二塁にいる場面で思いがけず2塁ランナーが盗塁に出た場面)

??ランナー走る。

(20) のような場面では、「走る」というデキゴトが生じたという点に重きがある。そのため、「走った」の形で「出来文」として表れている。

さらに、この場面において「走る」の形式で〈発見〉のニュアンスは出ていないが、このことは次のように考える。

(22) (ヒットが出て、二塁にいたランナーが三塁にむかって走っている場面を捉えて)

ランナー三塁に走る。

ランナー三塁に走った。

(22) における「走る」は適格性が高いが、この場合も〈発見〉のニュアンスは表れていない。同じ場面を「走った」で捉えることもできるがやはりこの場合でも〈発見〉のニュアンスは生じない。

先ほど、「実際の状況と話者の見込みとの食い違い」が生じなければ〈発見〉のニュアンスは生じないと述べたが、目前の状況において、ランナーが走っていることは自明のことであって、この場合に〈発見〉のニュアンスが現れないことは理に適っている。例えば (23) の例などでは〈発見〉のニュアンスが確認される。

(23) (散歩をしてたら、マンションの5階のベランダの手すりから子どもがすり抜けたを見つけて思わず)

危ない！ 落ちる！ (??落ちた)

cf. (マンションの5階のベランダから子どもが落下しているのを見て思わず)

あっ！ 落ちた！ (??落ちる)

(19) と (23) を比較すると、「走る」のような「動作の始発」を場面の助けによって「出来文」として捉えることができる動詞と、「落ちる」のようなもともと変化に焦点がある動詞では、実現中の動作が自明か否かで〈発見〉のニュアンスの現れ方が異なっている。詰まるところ、「走る」のような動詞では、目前の状況において実現中の動作は自明なものとして確認されるため、〈発見〉のニュアンスは表れてこないが、「落ちる」のような動詞では、未実現の場合や実現しかかった場面が多く、〈発見〉のニュ

アンスが出やすいと言える。

このように考えるならば、動的な事象において〈発見〉のニュアンスが現れることを説明するためには、動詞の語彙的な意味の違いだけでなく、事象が〈未然（実現中も含む）〉であるか〈已然〉であるかというところまでを含めた議論をしなければならないと言える。

ところで、今まで考察してきた用例に共通することは、いずれも「目前の状況を捉えた」場面で使用されているということである。ここで、「目前の状況を捉える」ということを考えてみると、例えばスポーツの実況放送というのは、目の前で起こることを逐次的に報告するものである。そのような課題を遂行するためには、話者の中には常に定延 (2004b) の述べる「探索意識」をもった「探索」が要求される。つまり、「目前の状況を捉える」という行為は、話し手の中に定延 (2004b) の述べるような「探索意識」を要求し、捉えている事態をデキゴト化させていると言える。しかしながら、これまでの議論を踏まえて考えてみると、「探索意識」のみでは〈発見〉のニュアンスが現れるためには不十分であって、やはり、「実際の状況と見込みとの食い違い」が要求されて初めて現れるものであると言える。

4. まとめ

以上の考察から、いわゆる〈発見〉の「タ」に関わるものには井上 (2001) や定延 (2004b) とは異なるタイプが存在することを提案した。

以上の考察は、井上 (2001) や定延 (2004b) の考察を否定するものではない。井上 (2001) や定延 (2004b) は〈思い出し〉や〈事実確認〉、〈反実仮想〉の「タ」を考察する上では依然として有効である。ここで述べたいことは、事象レベルで考察を行うと、「状態動詞」を含んでいても動的な事象として捉えられているものが存在するという点であり、「状態動詞」即、静的な事象という発想をとった研究方法では、このような用例を見落としてしまう恐れがあるということである。

注

1) この、〈ムード的〉という言い回しについては注意が必要である。研究者によって、①ムードと同様の意味で用いる、②従来のムードとは異なる

領域を示すために用いられている場合がある。本研究では②の立場をとる。

- 2) 例えば井上 (2001) では赤ちゃんの笑い始めを捉えて「あ、笑った」と言えることを〈発見〉の「タ」には含めていないが、定延 (2004b) では研究の射程に入っている。
- 3) 「探索」が行われているとする、定延 (2004a, b) の用例から察するに、「探索」は心的なプロセスで完結する場合もあれば、実際の行動が伴う場合もあるようである。

参考文献

- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」『「た」の言語学』ひつじ書房
- 尾上圭介 (1982) 「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1巻第2号 明治書院
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
- 金子亨 (1995) 『言語の時間表現』ひつじ書房
- 金水敏 (1996) 「いわゆる「ムードの「タ」」について—状態性との関連から—」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』汲古書院
- 定延利之 (2004a) 「モノの存在場所を表す「で」?」, 影山太郎・岸本秀樹 (編) 『日本語の分析と言語類型』くろしお出版
- 定延利之 (2004b) 「ムードの「た」の過去性」『国際文化学研究』第21号
- 定延利之 (2014) 「「発見」と「ミラティブ」の間—なぜ通時的研究と交わるのか—」定延利之 (編) 『日本語学と通時的研究の対話—テンス・アスペクト・ムード研究を通して—』くろしお出版
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』国立国語研究所 秀英出版
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語とシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語とシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 丹羽哲也 (1996) 「ル形とタ形のアスペクトとテンス—独立文と連体節—」『人文研究』第48号 大阪市立大学